

# 国際協働学習における協働性を視点とした学び —TEDDY BEAR Projectを通して—

Learning from the perspective of collaboration in international collaborative learning  
—Through the Teddy Bear Project—

清水 和久 (人間科学部こども学科教授)

Kazuhisa SHIMIZU (Faculty of Human Sciences, Department of Child Study, Professor)

## 〈要旨〉

外国との国際協働学習は、日本側の都合だけでは進めることはできない。相手がある交流なので、スケジュールの調整はもちろんであるが、展開される内容においても調整を図る必要がある。相手と調整しながら協働作業を進めていく必要がある。このような協働性が成り立つ関係性として5つの場面が考えられ、それは交流を行っている外国と日本の教員の間、日本の教員の間、日本の教員とクラスの児童・生徒の間、日本と外国の児童・生徒の間、支援の大学生と教員との間の関係である。

今回国際協働学習として、県内の7校14クラスの小中学校と、台湾の5校14クラスの小学校との交流を支援した。参加教師には相手校の先生とLINE等で連絡を取り、国際協働学習であるテディベアプロジェクト (TBP) を進めた。その中でこの国際協働学習に参加した、日本の教員にとつたアンケートをもとに、この5種類の協働性がどのように発揮され、どのような学びがあったかを明らかにする。

## 〈キーワード〉

国際協働学習, 協働性, 創発性

## 1 はじめに

国際協働学習は、実在する相手が存在する交流である。教科の学習とは違い、こちら側の都合だけでは学習は進まず、相手と話し合いながら、進めていく柔軟性が求められる。また、国際協働学習は、言語の問題もあり、国内の学校間の協働学習と比べて、質的な高まりを求めることには困難を伴う。

しかし、あらかじめ予想されるゴールの他に、当事者が工夫しながら行うことで、最初に考えていた以上の成果を獲得する場合がある。当事者が知恵を絞り、影響し合うことで、自分たちの努力がより良い形で実るのである。協働学習は、そこに面白さがあり、協働することで自分たちが達成感を味合える活動となる。この国際協働学習は、国内の協働学習に比べて質的な高まりは追及できないかもしれないが、自分たちの可能性を感じる活動であり、それによってゴールも変化する活動となる。「目標到達型の学習は、学習者の学びのプロセスが画一化されるだけではなく、授業という営みの創造性を失わせ、教育の可能性を矮小化す

る。」(アイスナー)<sup>\*1</sup>といわれている。到達目標型の学習は近年主流であるが、意外性がなく、主体性や創造性を育む場面では、十分ではない場合がある。この国際協働学習は、あらかじめ決まったカリキュラムを実行するのではなく、枠組みは確かに存在するが、相手が存在し、リアルタイムに影響を与えあう当事者としての変数的要素が複数あるところに面白みを感じる。

これは教師自身のアクティブラーニングにもつながる学習方法である。教師にとって変化に対応するセンスが求められるので、教師自身のスキルアップにもつながる。これらの関係性において、協働性という視点で以下の5つの協働性を視点として行きたい。

- ①同じ教育者として外国の教員と同じプロジェクトを協働で実施する関係性の中での協働性
- ②国内の参加の先生同士が経験や考えを持ちよってアイデアを共有できる協働性
- ③教員も初めてで、見通しがよく持てない中で子供と取り組んで行く協働性

- ④日本の児童と外国の児童との学習者としての協働性  
 ⑤教員志望の大学生が国際協働学習のプロセスに関わり現場の教員と進行に応じてかかわる協働性

この5つの協働性に注視する。またこれらの協働性が複雑に絡み合い、部分の性質の単純な総和にとどまらない特性が現れる「創発」に発展することにも期待したい。国際協働学習は変数が多く存在するがゆえに、学習する面白さを作り出すと期待している。

参加校は、あらかじめ決めた大まかなスケジュールをもとに国際協働学習をおこない、その進行を、第3者である研究者である筆者が外部から支援し、大学生が内部から支援する形で進める。

## 2 研究の目的と方法

### 2-1 研究の目的

国際協働学習に取り組むプロセスの中で、日本の教員、児童・生徒、大学生、外国の教員の間にはどのような協働性が生まれてくるかを明らかにする。

### 2-2 研究の方法

- 1) 国際協働学習の組織体制の構築  
 研究組織の中における参加校の位置づけ
- 2) TBP (テディベアプロジェクト) の内容説明、及びカリキュラムの決定
- 3) 5つの協働性の関係性  
 内部の人的関係の関わり方の可視化
- 4) 協働性が見られる事例  
 小学校教員の典型的実践事例をもとに、協働性にかかわる場面の抽出
- 5) アンケート調査とその結果

## 3 研究の内容

### 3-1 研究組織体制

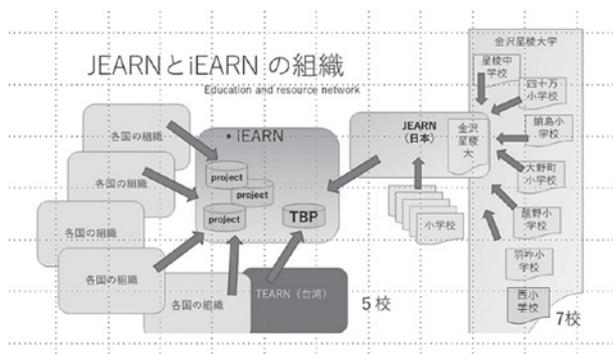


図1 外部組織にあるTBPとの関係性

本研究で行う国際協働学習は、iEARN (international education and resource network)<sup>\*2</sup>の中のTBP (Teddy Bear Project) に参加する形で行った。このiEARN のプ

ロジェクトに日本から参加するには、まずiEARN の日本支部であるJEARNに会員登録し、その後JEARNを通してiEARN のプロジェクトに参加することになる。JEARN<sup>\*3</sup>加入後は、参加校が直接iEARN のプロジェクトからTBPに参加するわけではある。しかし、その場合の交流手段が内部の掲示板になるのであるが、今年度は掲示板の移行の作業年度に当たり、初めての場合は、なかなか敷居が高いので、大学の研究者である筆者とそのゼミの大学生が中に入り、直接日本と大和の間に入ってのTBPのサポートを行う形で実行する。

今年度の参加体制。

石川県内からの参加は小学校6校、中学校1校で、中学校は（1年生3クラス）、小学校は、6年生（9クラス）56年複式（1クラス）4年（1クラス）の計14クラスである。また、プロジェクトの相手は台湾の小学校。台北市（1校4クラス）、嘉義市（3校9クラス）、高雄市（1校1クラス）である。

県内の参加校の研究体制として、1か月に1度の頻度で研究会（zoom）を開き、活動の進捗状況や、課題などについて相談する。今年度はZOOM開催が可能なので、金沢市内だけでなく、県内の遠方からの参加も募った。

### 3-2 TBP の内容及びカリキュラムの開発



図2 TBPの内容説明の図

TBPとは、自分たちが外国の交流校を訪問することができないので、自分たちの代わりに、ぬいぐるみを留学させるものである。海外に送り出すときには、自分たちの代表者としてTBのぬいぐるみのパスポートや自己紹介を考えることによって、日本人としてのアイデンティティを考慮することができる。また、外国に送ったTBの現地での様子を写真で送ってもらいことで現地の文化などを理解することができる。さらに、外国から日本にやってきたTBを通して日本の生活を紹介することができる。文化の紹介だけでなく、SDGsなどの共通テーマを決めTV会議で発表し合うことも可能である。

外国から送られたTBという存在があるので、相手を意識した国際協働学習が可能である。

表1 TBP のカリキュラムと研究会の内容の日程表

月	児童の意識	教師の動き	研究会
4月	学習の見通しを持つ	国際協働学習の動機づけ	
5月	台湾についてしらべる		
6月	100人村ワーク体験	交流校決定 LINEグループ作成	第1回目 顔合わせ
7月	発信内容の調査	地域情報の蓄積	
9月	ペアの性格付けをして送付	台湾の児童とのペア決定	第2回目 送り方
10月	台湾からペアの到着	ペアとの活動の話し合い	第3回目
11月	TV会議①自己紹介	TV会議練習	第4回目
12月	X'マスカード交換	英語でカード作成	第5回目
1月	TV会議②発表会	SDGs関係の内容	
2月	TV会議③お礼の会		第6回目
3月	振り返り		

台湾の新学期は9月からである。日本の新学期が始まった段階では、まだ交流先は決まっていない。この期間を利用して、発信できるコンテンツを蓄積することができる。また、国際協働学習を始める動機付けとして、大学生による「世界がもし100人の村だったら」のワークショップ行うことで世界に目を向けてもらおうという試みである。

これらの準備のあと9月から国際協働学習を始めることになる。日本は4月から新学期が始まっており、交流開始とともに自己紹介カードなどを早めに送ることができる。日本がリードしてスタートできるのである。

TBPは枠組みだけが決まっており、何を協働学習の題材として取り上げるかまでは決まっていない。しかし文化紹介だけでは、質的な高まりが望めないため、テーマをSDGsに関わることにできないか研究会で投げかけることとした。

3-3 協働性が発揮される場面

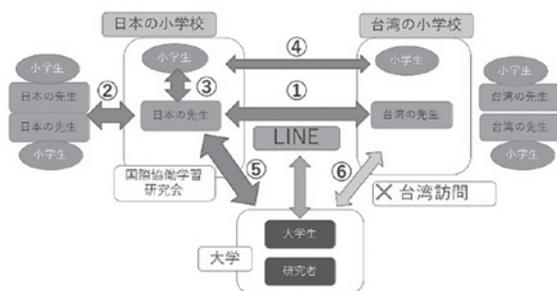


図3 5つの協働性が発揮される関係図

協働学習は、双方向性が重要であり、一定の枠組みの中で、そのゴールに向かう道筋において、互いがアイデアを出し合いながら、よりよいものを作り出すプロセスを重

視する活動である。以下5つの関係性において想定される協働性の内容を述べる。(以下図3の①～⑤の番号と対応)

①日本と台湾の教員との関係性における協働性

両者の教員の交流には、言葉が一番の壁である。しかし、交流手段として教員間でLINEグループを活用することで障壁が減るとされる。具体的には日本と台湾の教員と交流用のLINEグループをつくり、そのグループに翻訳アプリを参加させることで、日本語から中国の繁体語に自動変換、その逆に台湾の繁体語が日本語に自動変換される。両国ともLINEはインフラ的な存在なので、日常生活の様子などが気軽にやり取りできるなど教師間の交流のプラットフォームとしては有効である。また、このグループには筆者及び支援担当の大学生も参加できるため、交流の実態もモニターでき、適切なアドバイスができる。

②日本の教員同士の関係性における協働性

教員同士の情報交換の場としての研究会（月1回）。において、先行している交流事例を参考にしたり、課題などについての解決策の話し合いをしたりできる。また同じ学校の、同学年の教員同士で日常的な話し合いの機会がある。

③日本の教員と学級の児童との協働性

これは日常的な教育活動において展開される。教員は参加が初めての場合、交流の見通しを持つことが難しい。また、交流は相手のいる活動なので、日本側の計画通りに事が進まない場合も多い。また交流の内容は事前に決められたものではなく相手と話し合いで決まることになる。TV会議の内容については、児童の思いを聞きながら進めることができる。児童にとっても自分のやりたいことが実現される可能性が高いのでより関心が高くなる。

④日本と台湾の児童との関係性における協働性

児童同士の交流の手段は、交流ペアを決めることで、自己紹介カードの交換や、TV会議での会話である。また送られてきたTeddy bear を介した生活の様子を紹介し合うことである。

⑤大学生と日本の教員との関係性における協働性

大学生は日本の教員と台湾の教員とが入っているLINEグループに入ることによって、交流のやり取りを把握できる。交流内容を見ながら、適度に会話に入り、潤滑的役割を果たすことができる。例えば、台湾からペアの生活の様子の写真が提示されたとすると、大学生が日本の教員よりも先にLINEのチェックができる場合が多いので、スタンプなどで反応を返すことができる。すぐに反応があれば、台湾の先生のモチベーションに寄与することができる。また、月1回の教員との研究会では、zoomのブレイクアウトルームで個別に打ち合わせを持つ時間を取り、各小学校の今後の予定やTV会議の内容についての打ち合わせを行える機

会を持てる。

#### ⑥日本の大学生と台湾の教員、児童との協働性

例年であれば、筆者とサポート大学生は冬休みに交流先である台湾の小学校を訪問し、台湾の教員とも話し合ったり、現地の小学生の様子を撮影したりするのであるが、今年はコロナ禍のためできなかった。

#### 3-4 各協働性が見られる事例

表2 10人の参加教員が挙げた協働性の事例数と内容

校種	学年	経験値	異国間の教員	同国間の教員	学担と小学生	異国間の児童	教員と大学生	数
O小学校A	4年	経験豊富	○	○	○	○	○	5
TK小学校A	5, 6年	初めて			○	○		2
H小学校B	6年	初めて	○	○	○	○	○	5
H小学校A	6年	初めて	○		○			2
T小学校A	6年	初めて		○	○			2
T小学校A	6年	初めて	○	○	○	○		4
S小学校A	6年	初めて	○	○				2
S小学校B	6年	初めて		○				1
S小学校C	6年	2年目	○	○	○	○	○	5
S中学校A	中1	3年目		○		○	○	3
合計			6	8	7	6	4	

以下その具体的な内容

#### ①日本の教員と台湾の教員との協働性

##### ・H小学校A, B教諭

「本校の6年総合学習では、将来の夢についてのキャリア教育に取り組んでいる。どんな大人になりたいのかを調べたり話を聞いたりしながら行っているが、台湾の先生と話す中で、SDGsの視点をもって将来像を考える大切さを学んだ。ただ漠然となりたい職業を考えるよりも、今後、予測不能な世の中に備えて、どんな大人像を考える方が学習が深まる。社会に対して自分が何をしたいのかを考えていくキャリア教育というものを取り組んでいきたいと思うようになった。」

\*この記述から、自校の総合のキャリア教育の職業選択についてSDGsの課題を解決できる職業という選択肢も加わり職業選択の幅が広がったようである。

##### ・T小学校B教諭

「交流前に、ZOOMで簡単な自己紹介や当日の流れを確認することができた。また、LINEでどのように進めていくか確認したり、名簿など交流に必要な資料を相互に送ったりした。また、お互いに、Teddy bear 開封式の

様子を動画で送り合ったり、台湾の五常小のハロウィン・運動会の様子の動画を送ってもらったりした。

\*LINEでかなり詳しく打ち合わせを行い、交流の段取りを決めることができていたことがわかる。

##### ・S小学校C教諭

「LINEで交流により、事務連絡だけでなく、子どもたちの日頃の様子、例えば体育の様子の写真を伝えるなどすることで台湾の先生との親密感が増した。また、台湾からは協働学習の交流テーマとしてSDGsの地球温暖化のテーマの打診があったが、金沢市の学校では街づくりをテーマに行っているため、合わせることは難しいことをLINE上で伝え、別々のテーマで発表することになった。」

\*交流に合わせて新たに自分の学校の学習テーマを変更することは不可能に近いので、できることとできないことははっきりさせ、そのうえですり合わせを図っている。

#### ②日本の教員同士の協働性

##### ・H小学校A, B教諭

「初めての参加ということで、わからないことが多かったが、LINEや会議を通して実践を聞いたので、見通しを持ったり、参考にしたりすることができた。台湾の小学校との交流の前に、他校と、TV会議で交流の事前練習として、自己紹介をし合った。」

##### ・N小学校B教諭

「校内の先生同士では、どのように進めていくのか話し合ったり、総合の学習カリキュラムに当てはめたいのか話し合ったりした。地元の野々市市の良さを再発見し、台北市の良さを知らうとする意識づけにもなった。県内の他校の児童とTV会議の交流練習をしたことで、話し合いの進め方を確認できた。」

##### ・S小学校A教諭

「自己紹介の時にChromebookを使ってやったらどうかと話し合ったり、それぞれのクラスとペアの台湾のクラスがどんなやりとりをしているか情報交換したりした。また、金沢巡りで学んできたことからSDGsに関連させて、金沢のまちを未来に残すための取り組みをまとめることができた。これを台湾にどのように伝えるか検討中。」

\*自分のクラスだけでやっていると、不安になるものであるが、他のクラスから進捗状況や交流内容のアイデアをもらったり、台湾の休日情報などももらったりしたことによって、情報源が増え、手持ちの札が増える。月1回の研究会では、協働学習の課題などを相談し、国際交流経験者の過去の事例を聞いて話を聞いて参考にすることができた。

#### ③担任教員とそのクラスの小学生との協働性の事例

##### ・H小学校B教諭

「台湾の児童に、自分たちの何を伝えたいのかを問うに



## ○TV会議の事例

表3 TV会議の実施回数と大学生のサポート数

日時	日本の小学校	TV会議の相手	内容
9月30日	TK小B先生	◎大学生	TV会議練習
10月7日	TK小B先生	台湾精忠国民小	TV会議本番
10月21日	S小C先生	◎大学生	TV会議練習
10月25日	S小B先生	◎大学生	TV会議練習
10月27日	S小A先生	T小C先生	TV会議練習
10月27日	S小A先生	T小A先生	TV会議練習
10月27日	S小B先生	T小B先生	TV会議練習
11月10日	S小A先生	◎大学生	TV会議練習
11月15日	S小B先生	台湾精忠国民小	TV会議本番
11月15日	H小B先生	台湾五常国民小	TV会議本番
11月16日	T小B先生	台湾五常国民小	TV会議本番
11月17日	H小B先生	台湾五常国民小	TV会議本番
11月18日	T小B先生	台湾五常国民小	TV会議本番
11月18日	S小A先生	台湾精忠国民小	TV会議本番
11月18日	S小C先生	台湾精忠国民小	TV会議本番
11月30日	O小A先生	台湾新甲国民小	TV会議本番

TV会議は練習も本番も含めて16回おこなわれた。そのうち大学生が小学生のTV会議の練習相手となったのは4回であった。その他、本番のTV会議も筆者も含めてzoomのホストとして参加、他の教員への参考資料として録画した。またTV会議終了後気が付いたことを担任へ伝えている。練習の時に、担任の教師はあらかじめTV会議上での会話の留意点を伝えるのではなく、体験してみたら考えさせる方が有効である。隣のクラスの児童と練習するのが一番簡単であるが、大学生が台湾の小学生の役割を演じることで、子供同士では気が付かないアドバイスができる。例えば、大学生側は、台湾のこども役になって日本の事を聞いたり、台湾ことを紹介したりした。練習相手になってみると、みんな同じことを質問していたり、日本のことばかり話していたりして、台湾の情報の調べが足りないことが分かった。

## ・S小と台湾とのTV会議への学生のアドバイス事例

## ＜良かった点＞

- ・笑顔が素敵でした!マスクをしている分表情が伝わりにくいですが、笑顔を意識できてとても良かった!
- ・終わる時に、That's all.があるととてもわかりやすかったです!

## ＜改善点＞

- ・ジェスチャーがもっとあると伝わりやすいです。(ex.ギター弾いてる仕草や、テニスしているポーズ)
- ・最後にsee you.だけでもいいですが、Thank you!や、See you again!などがあると好印象です。

- ・自分が話す側のときに、反応してくれた相手にもまた反応を返せるといいですね!無反応だと相手も寂しいと思います。(good!, nice!, I seeなど)
  - ・相手からの質問や反応でわからないものがきても、後ろや横を見ずに前を見る意識をしたらいいと思います!そのときはパニックになってしまうこともあると思うので、わからなかった場合の決まり文句みたいなものを決めておくといい!(ex.ワンスモアプリーズ等)
- ＜ペア間の移動時間短縮＞
- ・今回の練習は45分びったりくらいだったので、次のペアはすぐ隣で待機しておいたら時間に少しでも余裕がでるかなと思います。
- ＜次の児童に移る時の声掛け＞
- ・See you, That's all の後に Next などの声掛けがあるとスムーズに交代出来ると思います

\*このような記録は、研究会で共有された。

## ○TBPマニュアル作成

参加が初めての教員からは、具体的な見通しが持ちにくいと言われたため、マニュアル化することを決意、学生は昨年度のTBPの報告書を主もとにマニュアルを作成することとした。内容項目は以下のとおりである。

- ・TBPの説明
- ・学習活動の流れ
- ・台湾の情報
- ・TV会議の方法、留意点
- ・大学生のサポート内容

このマニュアルは次年度以降のTBP参加者にも有益な資料となるはずである。教員と大学生との協働性については、現場で忙しい教員のサポートとしての面と、TBPの内容をよくわかっている大学生が筆者側の実施してほしい内容を伝えるという面がある。現場教員にとっても大学生とは相談しやすいので、大学側が柔軟な対応ができる点にある。

## 3-5 アンケート調査と結果

参加教員に以下の項目のアンケート調査を送りgoogleフォームで答えてもらった。質問は5点で回答数は10人であった。

## アンケート質問事項

- ①進捗に伴う児童の関心のレベルの変化(先生の意識)
- ②児童の意識の変化
- ③先生の意識の変化
- ④TBPに参加してよかったこと
- ⑤BPで参加して困ったこと

①児童の関心レベルの変化の度合い

TBPの6つの進捗状況の時期について、10人の教員の感じる児童の興味関心のレベルを6件法で尋ねた。

表4 TBPにおける児童の関心レベルの変化

関心度合い	開始	TB送付	TB来日	TB滞在中	TV会議練習	TV会議本番
---	1人	0	0	0	0	0
--	0	0	0	0	0	0
-	1人	1人	0	0	0	0
+	4人	2人	0	2人	1人	1人
++	3人	5人	4人	8人	5人	1人
+++	1人	2人	6人	0	4人	8人
合計点数	13点	18点	26点	18点	23点	27点

備考：「-」：全く低い、「--」：低い、「-」：どちらかといえば低い、「+」：どちらかといえば高い、「++」：高い、「+++」：とても高い。  
表の合計点数は「-」：-3点、「--」：-2点、「-」：-1点、「+」：+1点「++」：+2点「+++」：+3点で換算

スタート時には実感がなかったTBPも実際にペアが送られてくることで相手の存在を感じ、TV会議本番では自分のペアの相手と自己紹介をするので関心レベルが高まっていることがわかる。

実際に交流している相手が実在する証拠として、名前と顔が一致し、声が聴けるという経験は興味関心に直結していることがわかる。

②TBPに参加して児童の意識の変化の有無

児童の意識の変化について、「とても変化があった50%」「あった40%」「どちらかといえばあった10%」という結果であった。すべての教員が児童の意識の変化を認めている。以下意識の変化の内容

- ・ペアを通して、他者意識が高まり、人を喜ばせたいと思うように育ってきたこと。
- ・Cardのやり取りだけではなく、TV会議をやったことによって海外の文化を知ろうとする意欲が高まった。国の文化の違いから、人と人との違いを大切にそこから学ぶ姿勢ができた。
- ・同級生の相手、しかも外国人と交流する経験が、これまでになかったので、関心を持つようとしていた。
- ・同じ学年の人たちとの交流発表会はあるが、外国との交流になると、相手が今までとちがうこと（言語、コミュニケーション、ジェスチャー、文化の違い）など考えることがたくさんあったので、視野が広がった。
- ・英語を喋りたいという意欲が向上し、外国や多文化の存在を意識することができた。
- ・世界という広い視野で考えたり、SDGsについての意識が高まったりしたこと。
- ・ペア達をいろいろなところに連れて行って、日本の様子を伝えようとしている。

\*いずれも同世代の相手と交流し、通じたという思いが強く表れている。

③TBPに関する教員の変化の有無

教員の結果は、「変化がとてもあった70%」「変化があった30%」であった。以下その理由

- ・様々な方と話し合うことで、考えが広がった。
- ・国際理解に対する意識が高まった。
- ・国際交流の大切さ。
- ・一人一台端末の活用の幅を広げるきっかけになる。
- ・教室にペアがいることでいつも異文化とつながっているという意識を持てる。交流を行う時にいつもつながりを感じるものを用意しておくのは大切だと感じた。
- ・台湾の先生と、学校の様子などを伝えるなど、頻繁に連絡を取るようになり心がけた。
- ・日本以外の先生と関わることで、考え方の違いや交流を成功させるためにどのように進めていくのか考え合うことができた。
- ・国を超えた学習をすることで、学びが深まったこと。
- ・どのように児童主体で進めていくか指導力がわかった。
- ・人種の多様性について考える機会となった。
- ・本物の体験が子どもたちに大きな影響を与えることが分かった。

\*他の教員の児童主体の進め方を参考し、外国の教員と合意しながらTBPを進めながら、学びを深めていく面白さを感じられる。

④困難だったこと

- ・初めてだったことで戸惑いがあった。
- ・初めての取り組みだったので、何からしたらよいか分からないというのが1番困りました。
- ・見通しが持てなかったことが大きかった。どのように活動するのか、オンライン交流の仕方、会議の時間確保が難しかった。
- ・打合せなど活動内容の柔軟性が高いために、具体的にどんなことをするのか不明確だった点
- ・相手校のカリキュラムが見えない。
- ・やはり、台湾の小学校の先生とコミュニケーションをとるのが難しく、限られた交流の時間の中で、満足できる成果をあげることがなかなかできなかった
- ・年間指導計画に設定してある総合の学習と並行して進めていくこと。
- ・担当者が担任ではない場合、学年に所属していない場合の運営が困難。(中学校)
- ・学期が違うので12月に交流して、三学期にも思っていたが、双方の行事が合わず、12月ができなかった。
- ・ALTなど英語が長けている先生の確保が難しかった。

## ⑤よかったこと

- ・ 視野が広がり、グローバルな意識をもって教育活動をしていきたいと思えるようになったこと。
- ・ 大学生や台湾の学生と交流することで、子供たちにとっても教員にとっても国際理解に対する視野が広がった。
- ・ 教育課程の中に組み込みやすいこと。
- ・ 違う価値観から学ぶことの大切さを生徒が学んだ。
- ・ 石川県内の先生と交流することができたこと。児童が台湾の児童と意欲的交流しようと取り組んでいたこと。
- ・ ティーベアを通して学級に一体感が出た学習のゴールがまとめて終わり、発表会して終わりではなく、どうすれば伝わる?と一層考える姿が見られた。
- ・ 主体的な児童を育てる機会になった。
- ・ 他校の先生や大学生、台湾の方とコミュニケーションをとることができたこと。
- ・ 子どもたちに本当の相手意識をもって活動に取り組みさせることができたこと。

\*柔軟性が高いことが、ある意味困難性が高いと感じた理由にもなっている。しかし協働性をどこまで重視するかは主体性や達成感ともかかわってくるために難しいところである。はじめて国際協働学習を行う教員には、ある程度決まった型を、何度も経験がある教員には、協働性を高めていくという考え方もあるが、今後開始前に参加教員には、協働性に関する趣旨を十分伝える必要があると思われる。

良い点としては、相手が実在するがゆえに児童の主体性を育てたとの感想もあるため、同世代の交流を今後も重視していきたい。やって力の付く面白い実践を提供したいと考え、教師としての醍醐味を味わってほしいと思っている。

## 4 まとめ

今回、国際協働学習であるTBPを協働性という視点から分析した。決められたコースをこなすのではなく、互いの意見を出し合い、摺り寄せながらの協働作業の面白さを感じてほしい。

参加する日本の教員の研究会を足場として、その中で、交流が初めての教員がいても、互いに教え合いながら国際協働学習を行うことができることがわかった。1つの学校から複数のクラスが参加している場合には、TV会議の練

習をしたり、TV会議本番時に機器のサポートなどの協力体制をとったりすることが可能であった。

また交流相手と同じ外国の台湾ということもあり、一校が仕入れた情報（例えば台湾の冬休みの情報等）を日本の教員の共通のLINEグループで共有することができた。このように複数のクラスが同時に台湾とTBPを行うことで、団体戦のように互いに助け合って効率的にできることが分かった。

しかし、各クラスの交流クラスは違うので、相手の教員とテーマのすり合わせや相談ができれば、より深い学びに繋げることができる。例えば今回のテーマはSDGsを掲げたが交流先の学校と共通の課題に絞ることは難しかった。しかしTK小のSDGsのテーマである「海の豊かさを守る」と、台湾の精忠国民小の気候変動のテーマは、環境問題としてまとめたり、H小のキャリア教育と、台湾の五常国民小の気候変動も、SDGsの問題を考慮することで将来の職業の選択肢が増えることに繋がったりする。2回目のTV会議で互いに学んだことをわかりやすく発表し、つなげて考えることができ、協働することで互いに影響を及ぼしていること実感できる。

その他に、どちらかという発信に力を入れがちになるTV会議を、大学生相手の事前練習でよい聞き方や反応の仕方を学ぶことで、相手の言いたいことを押し量る受信にも力を入れられるようになった。結果TV会議の発信と受信のバランスが良くなったように感じられた。

今回、国際協働学習を「協働性」という視点で見ることで、相手意識が育ち、共通のテーマを決めてすり合わせながら協働で学ぶ良さを教員も感じたように思われる。

TBPはベアを送り合うという大枠は決まっているが、内容は当事者にゆだねられている創造性の高い活動である。総合的な学習のテーマをうまく相手とすり合わせながら、協働学習に結びつけることで、児童にも高い相手意識を持たせ、達成感も満足度も上げることができる。今後GIGAスクール構想によるタブレット端末を活用することで、発信力を高め、創造性のある活動が可能になるとも考えられる。教員自身が外国とつながる面白さを味わい、国境を越えて同じ教育者として未来を託す子どもたちの教育に携われるおもしろさを味わってほしいと思っている。

また将来教員を目指す学生が、学生時代にTBPにかかわることで、自分が教員になったときにぜひとも挑戦してほしいと願っている。

## 引用文献、参考文献

- (1) 「芸術批評が提起するカリキュラム構成の枠組み」 アートに根ざす授業論 桂 直美 教育学研究2021年88巻第3号

P491-431

- (2) <https://www.iearn.org/>
- (3) <https://jearn.jp/>